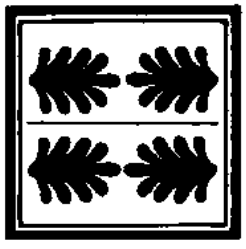
講談社文庫

# ある女の遠景

舟橋聖一

講談社



講談社文庫

ある女の遠景
舟橋聖一
昭和46年7月1日第1刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2-12-21
電話　東京（03)945-1111(大代表)
振替　東京　3930
製　版　株式会社まゆら美研
印　刷　豊国オフセット株式会社
製　本　株式会社大進堂

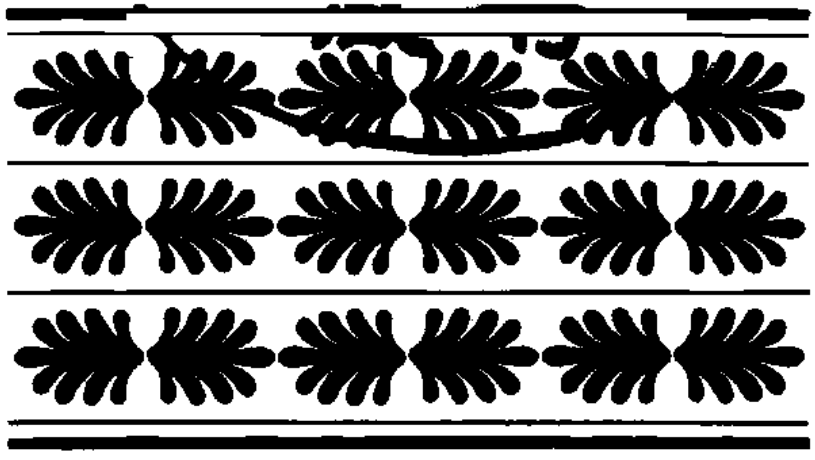
© Seiichi Funahashi 1971
Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります。
（落丁本・乱丁本はおとりかえします）

炎社文庫

# ある女の遠景

舟橋聖一



講談社

# 目次

ある女の遠景　五
ある女の遠景　七
霧また霧の遠景　六三
猫と泉の遠景　一三一
雪と狐の遠景　一九七
痩牛のいる遠景　二六一
維子の兄　丸谷才一　三八九
年譜　四〇七

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# ある女の遠景

# ある女の遠景

## 1

彼岸の入りになると、維子は叔母の墓詣りに、東京から二、三時間、のろい汽車に乗って、古風な城下町の小さい寺をたずねる。維子は、スピードのある電車や自動車に乗るよりも、一駅一駅、とまってゆくような乗物が好きだった。それに、維子は汽車に乗ったら、雑誌を読み漁ったり、毛糸の編みものをやったりしないで、只一心不乱に、窓外の景色を眺める。それには、天気のいい日にかぎる。速度のある急行に乗って眺めた景色と、普通列車の窓から見た景色とでは、同じ田畑でも森のある村社でも、小川の上にかかった土橋でも、小高い山の遠景でも、またその天地自然の中で、自転車のペダルをふんでいる若い男でも、三人連れの学校帰りの女生徒でも、まるっきり印象がちがうものである。維子はそういう車窓の印象を、一つ一つ、克明に楽しんでゆきたい。汽車が急に徐行し出すと、線路の近くを、ヒラヒラ舞っている蝶々とか蜻蛉とかが、何んと可愛らしく見えるものか。また、生きものではなくとも、線路のきわの黒土から、モヤモヤ炎え上っている陽炎などがいかにもノビノビと、心をなごめてくれる。そういう汽車の機関車は、少し上り坂になると、喘ぎ出す。ガッタン・ゴットン、ガッタン・ゴットンとやり出す。苦

し気な音を立てて、何輛かの客車を引っぱってゆく機関車のリズムは、聞き飽きるということがない。そのほうが、野や山や澄んだ川のある田園風景には、ぴったりだ。目まぐるしい世間からは、半世紀ほどおくれている感である。また、そういう汽車のとまってゆく小駅は、至って旅情がこまかい。駅員の官舎が、ホームのはずれにつづいていて、その前に花壇があったり、棕櫚の木が植えてあったりする。黒焼に焼いた古枕木を利用して、溝に小橋を架けてみたり、錆びて役に立たなくなったレールを二本束ねたのを塀代りに使ってみたりしている。地下道も、跨線橋もない駅は、汽車が出ていってから、乗客は線路へ下りて、ホームからホームへ横断しなければならぬ。そういう山あいの小駅は、駅全体、一日に何本しかとまらない上り下りの発着を、みんなで働く楽しみにしているのがわかる。

――維子は伊勢子というこの叔母が、真実の母よりも、好きだった。それに伊勢子は、母の妹でなくて、父方の叔母である。母の姉妹は三人もいたが、維子にはなじめない。それに母方の伯叔母は、みな円満な家庭の主婦であって、子供も大ぜい出来、不自由のない暮しをしているが、伊勢子は三十そこそこで、あの世の人となってしまったからである――。維子とは十三年のひらきがあった。維子がまだ小学生の頃、伊勢子は、九谷の家の玄関口を入りながら、歯ぎれのいい声で、

「つウちゃん、つウちゃん」

と呼んだ。その声を聞きつける維子の耳も敏かった。伊勢子の声なら、一町先からでも、聞きそこねない自信があった。維子が八ツで、伊勢子は二十すぎだったから、ほかの女は維子の眼中

にはいらなかった。伊勢子だけが、女の粋とも見えたのである。

「つウちゃんは、お伊勢さんに、段々よく似てくるようね」

と、母が父に話しているのを聞いたときは、うそ、うそ、あたいなんぞ、伊勢叔母さまに似る筈もない。あんな綺麗な叔母さまにと、否定はするものの、うそでもそう云われたのがうれしくって、その夜はいつまでも眠りつけなかった。

維子の父はもと、県庁の内政部の役人だったが、その後新しく出来た図書館長に就任して、気楽な勤人生活を送っていた。いくつになっても、肥らないで、鼻下髭をたくわえていた。九谷脩吉といった。九谷家の総領で、若い時は、竹刀をもたせたら、滅多に人にゆずらなかった。父は妹の伊勢子を、眼の中へ入れても痛くないほど、可愛がっていた。母がときどき、妬いたほどだったという。母が維子のことで、

「お伊勢さんに似てきたから、いいでしょう」

と、父をからかっているのを、聞いたこともある。父が身の上の大事を、母に相談する前に、伊勢子に話したと云って、母がカンカンになっていたこともある。然し、母は町家の出で、女学校も中退で、ろくな勉強もしていなかったから、父からその点で疎外されても、ほんとうは文句が云えなかったのである。父と伊勢子が、伊勢子の名の由来に関して、日本の古い歌物語や三十六歌仙の話などに興じると、母はシュンとなって、押黙っているほかはなかった。それに母は中年で、耳を患ってから、父の話が聞きとれず、父に欲しいものを取ってくれと云われても、間違ったものを出して渡して、父に剣突をくっている場面が度々あった。母は辛抱強いタチで、少

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

少の剣突には、ビクともしなかったが、時々父が東京へ出かけ、文部省へ行ったり、図書の購入をしたりする帰り、土産に買ってくる呉服物とか手提類が、母のよりも伊勢子のものが多いのには、さすがに不満をかくせなかった。然し正直なところ、伊勢子に似合うものは沢山あったが、年よりずっと老けて見える母に丁度いいものは少なかった。そう云う母が、街の中央にある松山百貨店へ行くと、これもあれも、伊勢さんに似合いそうだというものばかりで、自分のにといって買ったのを、見たことがない。

伊勢子は父に似て、痩ぎすで、首は細いが、胸から下は、ふっくりしている。維子とすれば、母のお供で歩くよりも、伊勢子のお供がしたかった。

よく、伊勢子に手をひかれて、一の堀にかけた大手橋を渡って、二の丸にはいると、桜並木のある道を、本丸のほうへ、ぶらぶら歩いたものだが、八ツの春の維子は、まだ伊勢子の胸のへんにも、背丈がとどかない。いつでも、伊勢子の手は、ひいやりしていた。その手へ、美しい翅の蝶々が飛んでくることもあった。蝶々は伊勢子の肩へ、翅を休めることもある。それを払おうともしなかった。そういうときは、何かジッと考えこみながら、その並木道を歩いていたのだろう。

伊勢子は何ンでも、すぐ維子にくれた。ハンケチでも、手鏡でも、香水瓶でも、爪切鋏でも……。

「つウちゃん、これ欲しい？」

と訊き、維子がウンとうなずくと、惜し気もなかった。母には、ずい分、ねだっても、なかなか、くれない。ハンケチだけでも、伊勢子から貰うほうがずっと多くて、抽斗にいっぱいだっ

た。その中には、「いせ」の二字を縫取りしたものもあった。母はそれを見て、人の名前のついたハンケチを使うのは、およしなさいと、咎め立てた。維子は母にかくれて、伊勢子のハンケチを、今でもこっそり、袂に入れることがある。

古い城廓の一部に、図書館があり、県庁があり、裁判所や商工会館があり、また陸軍の聯隊本部があったりするが、本丸付近から北西の一帯は、所々、小動物を入れた丸型の檻のある子供の遊び場になっていた。維子は父のために、弁当を届けに行った帰り、よくそこで遊んできた。本丸の中に、瓢箪形の小さい池があって、緋鯉が泳いでいた。池の汀に、ふと、伊勢子が立っていることがあると、維子はずっと下の、猿のいる丸檻のあたりからでも、

「ああ、叔母さま」

と、高い声で呼びつつ、その急な勾配を走り上って、息を切らした。なぜ伊勢子が、そんな汀などに、一人で立っているのか、その意味は知らなかった。

「図書館へ行きましょう」

「今、お弁当を届けてきたばかりよ」

「もう一度、行きましょう」

伊勢子は汀をはなれて、青い苔のある坂を降りた。父のいる館長室の窓からは、いくつかの城門の甍をこして、その下に、城下街の南側の全貌が望まれた。父は気むずかしいので、届けた弁当が、カラになっていることもあれば、一箸もつけずにあることもある。フタをあけるなり、すぐしめてしまうのだろう。これには母が散々泣かされた。母もずい分気を遣うのだが、父が一ト

目で、食慾を失うのも、わかる気がする。然し、母のつくった弁当が、箸もつけず、そのままになっているのを見るのは、つらかった。

「紋哉さんが、今までここにいたのだ」

と、そのとき父が云った。

「あら、そうなの。私は又、一時間も待ち呆けよ」

二人の対話は、維子の頭の上を、通りぬけた。維子はわざと、大人の話の圏外にいた。まだ自分は子供だから、大人の話はそらとぼけて、聞いても聞かない振りをするほうがいいと、子供は子供で、大人の気のつかぬ保身を心得ているものだ。それでも、紋哉という男の名を耳にしたのは、そのときが最初だった。子供心に、紋哉何者ぞと思ったのは、忘れもしない。

それから十数年後の今日、維子を乗せた下り列車は、天保の頃、古い藩主がこしらえたという名高い公園の下を、西から東へ走っている。維子は窓の外へ首を出して、思い出の残っている公園下の小道や、細い小川や段々に水の涸れてゆくS沼などを、うっとりと眺めずにはいられなかった——。汽車はこの沼のほとりを走るのが合図で、線路は街に近づき、やがてM駅の構内へはいるのである。

## 2

伊勢子の墓のある誓山寺は、街の北側を流れている那珂川のほとりにあった。そこまではバスも行かないので、維子は街の中央道路を走っている路面電車に乗り、広小路で降りて、そこから

鉄砲町をぬけ、俗称風呂下といっている部落から万代橋へ道を取ると、誓山寺の山門が見えた。山門の手前には早咲きの椿が五輪ほど花をつけていた。

そこをくぐると、十メートルばかりの石だたみがあって、もう一つ、中門がある。それをくぐって左へ折れると、一郭の墓地である。維子は、墓地の入口にある涌き井戸の前にしゃがんで、東京から手に持ってきた洋花を、一度水にひたした。井筒は低くて、緑美しい苔がついていた。向う側に、丸い穴がぬいてあって、涌いてくる水はそこから外へ流れてゆくから、井筒のへりを越すことはない。フリージヤ、アネモネ、チューリップ、ヒヤシンス、君子蘭、スノー・ドロップなどの花々が、気のせいか、水に濡れると、パッチリと目をあけたように見えた。それから、袂をくわえて、維子は白い手を洗った。伊勢子の手も白かったが、維子もそれに負けない位だ。水に濡れたフリージヤの白も、みごとに冴えている。花をさげ、墓地と墓地のせまい小径をぬけると、

九谷家代々之墓

それにつづいて、半分ほどの大きさで、万成花崗の墓石に、

九谷伊勢子

とだけ書いてあるのは、父脩吉の筆蹟だった。彼岸の入りとて、その界隈は、墓の手入れが行届いているが、九谷家の墓所は、荒れるにまかせて、掃除も一つ出来ていない。維子は花々を供える前に、ほこりにまみれた二つの墓を、洗わねばならなかった。伊勢子の墓に、花をおき、再び墓地の出口から、中門横の庫裡の勝手口へ顔を出して、

「ちょっと、手桶を拝借させて下さいな」
と頼みこむ。何か手仕事をしていたその寺の肥った大黒さんが、手を休めて、眼鏡ごしに、
「どなたでしたっけか」
「九谷の家の者ですわ」
「あれまア……お見それして……お墓さ、よごれて居りますけか」
「大分ね」
「そりゃ申訳ありませんけ……一昨日、どえらい風さ吹いてね。その前の日に、一度、きれいにしましたけが、またすっかり元通りになりましただ。今、水さ持って行きますべ」
「これさえ拝借すれば、いいンですよ」
「お嬢さまには、重くて持てますまいによ」
「ホホホ。そんなことないわ」
大黒さんが、やっこらさと立上る前に、維子は手桶をとって、もう一度、涌き井戸の前へもどると、口きり一ぱい、水を掬んだ。が、さて重い。維子は着物の裾をまくらねばならなかった。裾をまくれば、その下は、一越の長襦袢だが、旅に出るので、少し気が早いものの、袷をぬいで、ひとえにしてきたのである。その長襦袢までは、まくれない。となると、形ばかりは威勢がいいが、手桶の水をひっかけては何ンにもならないのだ。右の手に手桶を提げたら、左手を宙にうかしてバランスをとるのだと、母に教わったことがある。それで維子は、右肩ばかりさげないで、左の肩もふりながら、墓地の間を歩き出したが、二、三歩で、やっぱり、ビッショリ水を浴

びた。長襦袢が濡れ、その下も濡れまたその下も濡れた。草履にも水をかぶり、足袋まで濡らした。

「ナンセンス」

と、彼女は云った。そのとき、大黒さんが追いついた。

「あれ、あれ、あれ。お嬢さまよ……長襦袢が濡れただか。だから、およしなと云ったにさ……あれ、足袋も――」

「足袋ぬぐわ」

維子は手桶を土におろし、墓の柵に手をかけて、足袋をぬいだ。片方だけぬぐわけにもいかないので、両方こはぜをはずして、素足になった。大黒さんの云う通り、墓守の爺さんにでも、水をはこんでもらえば何ンでもなかったのに。

「慾ばって、口きりいっぱい掬んだのが、悪かったのね」

「いっそ、両手にさげるほうが、こぼれんけ」

維子は伊勢子の墓から洗い出した。こんなに、泥やほこりを被っていては、さぞいやだろうと思うと、お先祖の墓より先に、洗い浄めたいのである。大黒さんも裾をまくり、短い腰巻をのぞかせた股をひらいて、墓のてっぺんから、水をかけた。その勢いで、墓は忽ち洗われていく。花立や香立の穴からは、水と一しょに、小虫の死骸や枯れっ葉が、ブクブク浮いてきた。この分では、一昨日の風の前に、一度きれいに掃除したという話は、眉唾だが、こうして洗い出せば、そんなことはどうでもよかった。とうとう、維子も跣足になって、墓を洗った水が、自分の足の甲

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com